

教育実践における真理の意味

ーアーレントによるハイデガー真理論の受容と批判を手がかりにー

基礎教育学コース 川 上 英 明

The Meaning of Truth in the Educational Practice:
A Study of the Acceptance and Criticism of Heidegger's Theory of Truth by Arendt

Hideaki KAWAKAMI

The aim of this article is to clarify on the meaning of truth in the educational practice, through the clarification on how Hannah Arendt (1906-1975) accepted and criticized of the theory of truth in Martin Heidegger (1889-1976). Heidegger argues that the authentic meaning of truth (Wahrheit) is the unconcealment (Unverborgenheit). Arendt accepts this meaning of truth and applies it to her concept of 'appearance'. But she criticizes Heidegger's concept of Dasein's Death (Tod) because it lacks the political character. Arendt develops the theory of truth and claims the meaning of our interacting is supported by the speech. This article's conclusion is the truth has to be thought by 'appearance' in Arendt's meaning and 'unconcealment' in Heidegger's meaning for educational practice.

目 次

序論

- A. 問題の所在
 - B. 先行研究の状況
 - 1. 受容——真理の二義性
 - A. アーレントにおける真理の二義性
 - B. ハイデガーにおける真理の二義性
 - 2. 批判——真理の不可変性と現存在の非政治性
 - A. 真理の不可変性
 - B. 現存在の非政治性
 - 3. ハイデガー真理論に対するアーレントの二面性
- ### 結論

序論

A. 問題の所在

本稿の目的は、ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) が、マルティン・ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の真理論をどのように受容および批判し、自身の真理論を展開したのかということを明らかにすることを通して、教育実践における真理の意味について考察することである。

小玉 (2016) が整理しているように、戦後の啓蒙主義的教師像は、「真理のエージェント」から「子どもの発達への応答的存在」へと発展した¹⁾。このような発達主義的な教師像に対して、小玉は伝習館闘争を参照しつつ、「教師の権威性批判」の歴史的文脈を概観し、「政治的コーディネーター」という教師像を提示している (cf. 小玉 2016: 45)。

小玉の議論において「真理」という概念は、すでに戦後啓蒙主義から発達主義的教育観によって克服されたことになっている。しかし、この議論では、必ずしも「真理」という概念が指している内実は明確ではない。

さらに、2017年3月に改正された『小学校学習指導要領』において、教育の目標の第1項目が、「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」(文部科学省2017: 1, 強調引用者)とされているように、教育における「真理」の位置は確固として存在している。しかし、ここにおいてもまた、「真理」という概念の内実は示されていない。

教育と真理は、不即不離の関係にある。しかし、「真理」という概念の内実が、論争的なものであるにもかかわらず、自明なものとして理解されていることは、

近代教育を考える上での根本問題である²⁾。このことは、すでに乗り越えられたとされる「真理のエージェント」としての教師像すら、明確に理解することができないということを示している。

本稿では、小玉が主に依拠している政治思想家であるアーレントが、「真理」をどのように捉えていたのかということ、彼女の師であるハイデガーの真理論との関係を踏まえながら明らかにする。これを通して、教育実践における真理の意味へ接近することが本稿の課題である。

B. 先行研究の状況

アーレントにおける真理の問題は、これまで、彼女の論文「真理と政治」(1967年)に依拠しながら論じられてきた³⁾。この論文は、アーレントが主観的に「真理」を論じたほとんど唯一のものである。

しかし、アーレント自身は、当該論文において、真理とは何であるかという事柄それ自体を論じたわけではない。というのは、アーレントは「真理と政治」の末尾において、「しかしながら、私がここで示そうとしたことは、この〔政治の〕領域全体が、その卓越さにもかかわらず、制限されているということ——それが人間と世界の存在の全体を包括しているわけではないということである」(BPF, 259=360, □ 内引用者)と述べているからである。したがって、アーレントにおける「真理」とは何であるかということをはっきりさせるためには、「真理と政治」ではない論述における「真理」への言及に着目した後に、「真理と政治」を検討しなければならない。

これまで、アーレントの政治理論におけるハイデガーの真理論の影響に関しては、主に次のようなことが明らかにされている。すなわち、ハイデガーが『存在と時間』で展開した真理論における「アレーティア」としての真理概念が、アーレントの「現われ」概念に強い影響を与えたということである。本稿で後に確認するように、ハイデガーは、ギリシア語で「真理」を意味する「アレーティア」を、その語源的な意味にさかのぼることで、「隠れなさ」(Unverborgenheit)と解釈した。先行研究では、アーレントの「現われ」は、この真理概念を踏襲したものであるということが明らかにされている。例えばタミニオー(1997)は、ハイデガーの講義『ソフィスト』における「アレーティア」が、「レゲイン」(話すこと)と不可分であることを指摘し、アーレントの「言論による現われ」という概念に影響を与えたと主張している(cf. Taminiaux

1997: 90)。また、ヴィラ(1996=2004)は、ハイデガーのアレーティアは、アーレントの「私的領域と公的領域」という、「隠れていることと現われていること」の区別に根本的な影響を与えたと論じている(cf. Villa 1996: 147=2004: 243)。

しかし、これらの研究では、アーレント自身の言質のもとに、ハイデガーの真理論の影響関係を明らかにするという試みはなされていない。それは、アーレントが主観的にハイデガーを論じたことが少ないという事情と関係している。とはいえ、アーレントの諸論稿においては、随所にハイデガーへの言及を見出すことができ、先行研究はこれらの言及を見落としているように思われる。

ここで注目すべき論文は、アーレントがハイデガーに依拠しつつ「真理」について述べている論文「権威とは何か」(1959年)である。詳細は第1章で検討するが、アーレントはこの論文のある脚注において、ハイデガーに言及しつつ、真理について述べている。これは、フォルラート(1988=2001)も指摘している点であるが、アーレントはハイデガーの独特な真理概念を堅持していたのであり、彼女の「真理」の概念把握に、ハイデガーの思想が強い影響を与えていたことが分かる論文である(cf. Vollrath 1988: 358=2001: 476)。本稿は、フォルラートの指摘を受けて、論文「権威とは何か」におけるハイデガーの真理論への言及を検討しなければならない。

したがって、本稿は、次のような構成で論を進める。アーレントによるハイデガー真理論の受容。特に、論文「権威とは何か」における真理の二義性について(1章)。アーレントによる真理およびハイデガーへの批判。特に、論文「真理と政治」における真理の不可変性と、論文「実存哲学とは何か」における現存在の非政治性について(2章)。ハイデガー真理論に対するアーレントの二面性(3章)。教育実践における真理の意味について(結論)。

1. 受容——真理の二義性

A. アーレントにおける真理の二義性

アーレントは、1954年5月8日付けのハイデガー宛ての書簡において、自身が携わっている仕事に関し、以下の三点を挙げている。すなわち、「1、モンテスキューから出発して国家形態を分析すること。〔中略〕2、おそらく一方ではマルクスから、他方ではホッブズから出発して、人間の諸活動を分析するこ

と。〔中略〕3, 洞窟の比喩(そしてあなたのその解釈)から出発して、哲学と政治の伝統的な関係を描き出してみること〔後略〕(AHB, 145-146=118)の三点である。

本稿では、このうちの三点目にあたる、ハイデガーによる「洞窟の比喩」解釈から発して哲学と政治の伝統的な関係を描き出すというアーレントの仕事に着目する。というのは、ハイデガーによる洞窟の比喩の解釈は、アーレントにおいて、「真理」を論じる上での重要な参照項となっているからである。以下では、論文「権威とは何か」における議論を概観しよう。

アーレントは、同論文において、まず、権威が何でなかったかということ論じている。彼女によれば、権力(power)や暴力(violence)と異なり、「権威は、外的な強制手段の使用を前もって排除する」(BPF, 92=125)のものであり、それは、むしろ「自由(freedom)」と関連している。すなわち、「権威とは、人々が自分たちの自由を保持するような服従を意味する」(BPF, 105=143)のである。

アーレントによれば、プラトンが権威における「服従」を発見したが、しかし、プラトンは、権威の支配の資格を「法律」に与えてしまった。法律による支配は、権威主義的ではなく、むしろ明らかに専制的なものである(cf. BPF, 106=143)。法律のように理性的な「真理」に支配の資格を与えることに対して、アーレントは次のように述べている。「彼の〔プラトンの〕探究におけるごく初めに、彼は、真理、つまり私たちが自明だと考える諸真理が、心を強制し、また、この強制は、効果的であるために暴力を必要としないにもかかわらず、説得や論議よりも強力であるということを発見したに違いない」(BPF, 107=146, [] 内引用者)。

プラトンは、『国家』において、「洞窟の比喩」と呼ばれる比喩を論じており、アーレントは上述の議論の後に、この比喩の解釈を通して、「真理」に関する議論を展開している。プラトンがこの比喩において、「アイデアのアイデア」とも言うべき「善のアイデア」を論じたことはよく知られているが、アーレントは、そのアイデアが「二義性」を伴って描かれているということに着目する。すなわち、洞窟の奥から洞窟の外に出た人物は、「真実在」(true essences)としての善のアイデアを看取するが、その後、再び洞窟の奥へと戻ることによって、自らが看取した「真理」を、実践の「基準」(standards)と見なすようになるのである(cf. BPF, 112=152)。したがって、ここには、①「真実在」としてのアイデアと、②「基準」あるいは「尺度」(measures)として

のアイデアという「真理の二義性」(discrepancy: 不一致)が描かれていることになる。そして、アーレントは、この「真理の二義性」を主張した箇所へ、次のような脚注を付している。

この表現「真理の二義性」は、マルティン・ハイデガーの『真理に関するプラトンの教説』(ベルン、1947年)における洞窟の比喩の卓越した解釈に負うものである。ハイデガーは、プラトンがどのようにして真理(アレーテイア)という概念を変形させ、それを正しい言明(オルトテース)と同一のものとしたのかを論証している。〔中略〕しかしながらハイデガーは、哲学者が否応なく洞窟に戻されたときに経験する危険については明確に言及しているが、この比喩が政治的文脈で現われていることには気づいていない。〔後略〕(BPF, 284=393, [] 内引用者)

この脚注から、アーレントの真理概念には、ハイデガーの真理論が深く関わっているということが明らかとなる。さらに言えば、アーレントはとりわけ、「真理に二義性がある」という点をハイデガーから得ていると言明しているのである。それでは、ハイデガー自身の議論はどのようなものであったのだろうか。

B. ハイデガーにおける真理の二義性

ハイデガーは、論文「真理に関するプラトンの教説」(1940年)において、「真理」の概念を、古代ギリシア哲学の「アレーテイア」(ἀλήθεια)の語源的意味から論じている。この真理概念は、すでに『存在と時間』(1927年)において論じられていたものを敷衍したものである。すなわち、アレーテイアとは、「隠れ」を意味する「レーテー」を、否定の接頭辞「ア」によって否定したものであり、ハイデガーは、この真理概念を、「隠れなさ」(Unverborgenheit)と定義した(cf. SZ, 219; GA9, 223)。つまり、真理とは「発見しつつあること」(entdeckend-sein)を意味するものであり、決して「判断と対象との一致」といった伝統的な意味のみを持つのではない(cf. SZ, 214ff.)。

「判断と対象との一致」は、アリストテレスに始まり、カントに至るまで保持されていた真理概念である。ハイデガーによると、アリストテレスが『命題論』において、「魂が受け取ったことは、事柄と等しい」と述べたことが、後に真理の本質として「知性が事物に一致すること」として定式化されるに至った(cf. SZ, 214)。この「一致」としての真理概念は、カ

ントの『純粋理性批判』にも見受けられる。ハイデガーは、『純粋理性批判』から、カントの真理概念がうかがえる三箇所を引用し、彼の真理概念が、「一致」を前提にするものであったということを明らかにしている (cf. SZ, 215)。

しかし、カントは「一致」という概念そのものを検討していない。これに対して、ハイデガーは、「一致」の概念を検討することによって、真理概念は、存在論的には、「発見しつつ - あること」(entdeckend-sein)を意味するというを示している (cf. SZ, 218f.)。ハイデガーは、このような「発見性」(Entdecktheit)を、「隠れなさ」と同義のものとして言及する (cf. SZ, 219)。

ハイデガーによると、「洞窟の比喩」は、この「隠れなさ」としての真理に関する比喩として捉えることができる。彼は、プラトンの「イデア」(ἰδέα)を、「見相」(Aussehen)と解しつつ、それを「看取すること」(ἰδεῖν: イデイン)との関連において論じている。イデアは、看取されることによって、隠れていることから戦い取られ、発見され露わになり、隠れなさの意味における真理として理解される (cf. GA9, 214, 223)。この時点では、真理は隠れなさという一つの意義のみを持っている。

しかし、「イデイン」は、「イデア」を看取することという意味をも持つ。その場合は、その看取を可能とすることへと注意が向けられてしまう。そして、「そのことのためには、正しく見ること (rechte Blicken) が必要である」(GA9, 230)。したがって、ここに、真理のもう一つの意義である「正しさ」(ὁρθότης)が現れる。このようにして、伝統的な真理概念である「判断と対象との一致」、あるいは「認識と事柄それ自身との一致」が成立する (cf. SZ, 214; GA9, 230-231)。プラトンの「洞窟の比喩」とは、真理の本質が、隠れなさから、見相を正しく看取することへ変動したことの発源なのである。

ハイデガーは、この真理の二つの意義を、「二義性」(Zweideutigkeit)と呼び、「正しさ」としての真理を、「基準を与えるものとして」説明している (cf. GA9, 231)。ここにおいて、アーレントによるハイデガー受容の妥当性が示されたこととなる。

しかし、いまだに問題として残っていることは、ハイデガーが「洞窟の比喩」に政治的文脈を読み取っていないというアーレントの批判である。この批判は、そもそも政治的なものを主題としていないハイデガーの存在論的な「真理論」に対する批判として、やや性

急であるように見える。アーレントのこの批判は、どのような理論的背景を持つものなのだろうか。

2. 批判——真理の不可変性と現存在の非政治性

A. 真理の不可変性

アーレントは、論文「真理と政治」において、真理を、「理性の真理」(rational truth)と「事実の真理」(factual truth)との二つに分けている⁴⁾。前者は「数学的、科学的、そして哲学的真理」であり、後者は「事実と出来事」に関わり、政治的な意味合いを持つ真理である (cf. BPF, 226-227=312-313)。

古代においては、「理性の真理」と「政治」とが敵対していた。また、「哲学者の生」と「市民の生」との類比で語られるこの敵対は、「真理と意見」との敵対としても語られる (cf. BPF, 228=315)。真理一般を批判する立場を取るアーレントは、「すべての真理——様々な種類の理性の真理だけでなく、事実の真理もまた——は、妥当性を主張する様態において、意見と対立する」(BPF, 235=325)と述べた上で、次のように真理を批判している。

厄介なことは、事実の真理が、あらゆる他の真理と同様に、有無を言わずに承認されることを主張し、討論を不可能にするということであるが、討論は政治的生の真の本質を構成しているのである。真理に関係する思考とコミュニケーションの様態は、政治的なパースペクティブから見た場合、必然的に横柄で独裁的 (domineering) である。それらは、他の人々の意見を考慮に入れないが、これらを考慮に入れることが、あらゆる厳密に政治的な思考の特徴なのである。(BPF, 236-237=327)

アーレントが「真理」に下す判断は、「横柄で独裁的」であるという診断である。他の箇所において、「真理のパースペクティブから政治を傍観することは、私がここで行ったように、政治的領域 (political realm) の外側に立つことを意味する」(BPF, 255=354)と述べられているように、「真理と政治」は、「脱政治と政治」とも言い換えることができる対立である。アーレント自身、「真理と政治」を、次のように結んでいる。

概念的には、私たちが変えることのできないもの (what we cannot change) を、私たちは真理と呼ぶこ

とができる。比喩的には、それは、私たちがその上に立つ大地 (ground) であり、私たちの頭上に広がる天空 (sky) である。(BPF, 259=360)

したがって、アーレントにとって「政治的領域の外側」とは、真理の領域のことであり、それは彼女の比喩によれば「大地と天空」である。それゆえ、「大地と天空」と「政治的領域」という対比からも理解できるように、アーレントにとって真理の問題は、「私たちが変えることのできないもの」としての領域の問題なのである。本稿では、彼女のこの真理概念の性格を、〈真理の不可変性 (unchangeableness)〉と名付けよう。

これに対して、「政治的領域」は、人々が意見を交わす場として、確固たる真理の存在しない場である。アーレントの著『人間の条件』では、「人間事象の領域」(realm of human affairs) における「誰」(who) の現われが、哲学が問題としてきた「人間とは何か」に関する定義とは異なり、明確ではなく、その規定が不可能であるということが論じられている (cf. HC, 181=295)。さらに、「人間事象の領域は、厳密に言えば、人々が共に生きているところではどこにでも存在する人間関係の網の目 (web) から成り立っている」(HC, 183-184=298) と述べられていることから、本稿では、政治的領域＝人間事象の領域の性格を、複数の人々の「関係の網の目」から成り立つという意味を込めたものとして、〈可変性〉(changeableness) と性格づけよう。

アーレントがハイデガーによる「洞窟の比喩」解釈に政治性が欠如していると批判するのは、まさにこの文脈におけるものである。つまり、彼女は、〈不可変性〉の領域のものである真理が、〈可変性〉の領域である政治的領域において、自らを実践の「尺度」としてしまふ点に関連して、ハイデガーを批判している。確固たる真理が存在しない領域において、自らを「尺度」とする真理は、その「横柄で独裁的な」性格によって、人々の複数の可変的な「意見」と対立するのである。アーレントは、この対立を政治的領域に特徴的なものとして看取していた。

B. 現存在の非政治性

それでは、アーレントは、このような政治性の欠如という批判を、具体的にはハイデガーのどのような議論に対して向けていたのだろうか。

アーレントがハイデガーを批判する最初の論稿は、川崎 (2010) が整理しているように、論文「実存哲学

とは何か」(1946年) である (cf. 川崎2010: 3)。ここでは、当該論文での批判を検討するにあたって、まずは『存在と時間』における現存在の「死」の概念を確認しなければならない。ハイデガーは、現存在の「死」を次のように定義している。

現存在の終わりとしての死とは、現存在の最も固有な、他との関連もない、確実な、そのうえそれ自体不確定な、追い越すことのできない可能性である。死は、現存在の終わりとして、その終わりへと向かってこの存在者が存在していることのうちに在るのだ。(SZ, 258-259)

このように、現存在は、いわば「死への存在」(Sein zum Tode) である (cf. SZ, 234)。自らに最も固有で単独的な存在様態である死は、現存在を「不安」(Angst) という「情態性」(Befindlichkeit) のうちに置く。ハイデガーは、このことを、端的に「現存在は、本質的に不安である」(SZ, 266) と表現している。そして、現存在は、不安の只中にあって、「自分の実存の可能的な不可能性という無の前に」(SZ, 266) 置かれるのである。

自らの実存が可能ではなくなるという意味での「無」に直面することにおいて、現存在は、本来的な「自己」(Selbst) であることを決意する。ハイデガーは、この文脈における現存在の決意を、「決意性」(Entschlossenheit) と呼んでいる (cf. SZ, 296f.)。以上のようにハイデガーの議論を概観すると、現存在が「自己」として決意することと、「死」あるいは「無」との関わりが見て取れるだろう。

アーレントがハイデガーを批判するのは、この文脈においてである。彼女は、「実存哲学とは何か」において、次のように述べている。

死は、現存在の終わりかもしれないが、それは同時に、究極的に重要なものは私自身であるということを保証するものである。無そのものとしての死を経験することにおいて、私は、もっぱら自己-で-あることにのみ専念する機会を持ち、格言のような責めの様態において、私を取り囲む世界からきっぱりと自らを自由にするのである。(EU, 181=1, 245)

アーレントの解釈では、ハイデガーの「死」の議論、特に「自己」の概念は、人々との関係を考慮に入れず、もっぱら自らの「無」と関わるものとして論じられている。したがって、アーレントの見立てでは、ハ

イデガーの現存在は、無に直面しつつ「世界」から自らを切断することによって、他者の位相を削いでいると言える。彼女が指摘するように、後年のハイデガーが「民族」や「大地」といった概念で共同性を論じようとしても、結局のところ、「アトム化された自己たち」(the atomized Selves) (EU, 181=1, 246) という概念は残っている⁵⁾。「自らの類と同じ他者と共に地上 (the earth) に住むということが、もし人間の概念に属していないとすれば、人間に残されるものは、アトム化された自己たちが自らの自然本性からして本質的に相いれないような (alien) 共通の基盤を与えられる、機械的な和解だけである」(EU, 181=1, 246)。したがって、ハイデガーの「自己」の政治性の欠如は、アトム化されていることを前提とした自己たちであるという点で、後年に至ってもなお残存している。本稿では、ハイデガーの現存在分析における「自己」概念へのアーレントの批判を、〈現存在の非政治性〉への批判と呼ぶ。

以上から、アーレントがハイデガーに加える批判の論点が、その〈非政治性〉にあるということが示された。ハイデガー的な「自己」は、他者との関わりを断ち、もっぱら自らの「無」と向き合うことによって、政治的な意味での共同性を断ってしまうのである。ただし、後年のアーレントは、ハイデガーの「自己」概念への批判に対する自己批判を行っている (cf. 川崎 2010: 22, 26f.)。しかし、少なくともこの時期におけるアーレントのハイデガー批判の論点は、〈非政治性〉にある。この批判は、本章のA節で確認したように、〈真理の不可変性〉と通じる批判である。すなわち、ハイデガーの「自己」も、真理の不可変性と同様に、政治的な領域の〈可変性〉から脱し、〈不可変性〉の領域にあるとする批判である。このように、アーレントのハイデガー批判は、〈不可変性〉と〈可変性〉の観点から理解することが可能となる。

3. ハイデガー真理論に対するアーレントの二面性

前章までの議論において、本稿は、次の二点について明らかにしてきた。第一に、アーレントがハイデガーの「洞窟の比喩」解釈に則り、真理には「尺度」としての真理と、「隠れなさ」としての真理との「二義性」があると理解していた点である。ここでは、アーレントがハイデガーの真理論に対して、肯定的に受容していたことが窺える。

第二に、アーレントが、〈真理の不可変性〉を批判

した手法と同様に、ハイデガーの「自己」概念を批判していた点である。他者との共同性を断ち、自らに最も固有な「死」という「無」と向き合うことにおいて、現存在は非政治的なものになってしまう。アーレントの「自己」概念批判は、彼女の〈真理の不可変性〉批判の文脈を踏まえた上で理解されなければならない。

以上のように、アーレントがハイデガーに対して取る態度には、明確な二面性がある。本章では、この点に加えて、さらにアーレントがハイデガーの真理論を受容していた点を明らかにする。それは、彼女の「現われ」(appearance) という概念に関するものである。以下では、この論点を検討しよう。

アーレントは、『人間の条件』第24節「言論と行為における行為者の開示」において、人間の「複数性」(plurality) は、個々の人間の「唯一性」(uniqueness) の逆説であると論じている。彼女にとって、政治的領域が「人間事象の関係の網の目」である以上、そこには複数の人々が存在していなければならない。人々は、複数であるけれども、その一人ひとりとは、それぞれに唯一的なものを持っているのであり、この唯一性がある初めて「複数性」が成り立つのである (cf. HC, 175f. = 286f.)。人間が「あらゆる物」(everything) と共有する「他性」(otherness) や、「あらゆる生き物」(everything alive) と共有する「差異性」(distinctness) は、人間に特有なものとして、「唯一性」となる (cf. HC, 176 = 287)。ここで、物にも生き物にもない、人間のみに特有なものとして論じられるものが、「言論」(speech) と「行為」(action) である。人間は、言論し行為をすることによって、自分が「誰であるか」を露わにする。アーレントは、「言論」によるこの「誰」(who) の開示を、人間の「言論と行為」、すなわち「言葉と行ない」(words and deeds) に託している。

しかし、言葉と行ないとは、言葉の方が、人間の「誰」の開示により密接に関連している。つまり、「明らかに言論と開示との親近性の方が、行為と開示との親近性よりも、はるかに密接である」(HC, 178 = 290)。そして、アーレントは、『人間の条件』を自らドイツ語訳した『活動的生』において、この箇所に必要な脚注を付している。

言論と開示、あるいはハイデガーが言うところの「開蔵」(Entbergen) は、行為と開示よりも密接に結びついていて、プラトンは、語り——レクシス——が、行為——プラクシス——よりも、真理（「隠れなさ」というハイデガーの意味における）と深く

関係していると考えていた。(Va, 459=478)

ここでアーレントは、ハイデガーのどの文献を参考にしたかを示していない。しかし、すでに論文「権威とは何か」におけるハイデガーへの言及を確認した本稿にとって、それが論文「真理に関するプラトンの教説」であることは疑いえないことである。したがって、アーレントは、彼女の政治理論において最も重要な概念である「現われ」を、ハイデガーの「隠れなさ」に依拠しながら構築していたということが判明する⁶⁾。

しかし、ここでは、ハイデガーに対するアーレントのさらなる二面性を見て取ることができる。アーレントは、『存在と時間』における「自己」概念の非政治性を批判していた——それは結局のところ、真理の不可変性への批判と通じている——のであるが、その一方で、ハイデガーの独特な真理概念である「隠れなさ」を、自身の「現われ」概念の理論的根拠としていたという新たな二面性がそれである。

本稿は、この二面性を、本稿の主題である〈教育実践における真理の意味〉の考察のための手がかりとして、むしろ積極的に捉えたい。それは、「尺度」と「隠れなさ」との〈真理の二義性〉、および政治的な意味合いのある「現われ」と人々が共にあることの意味とを再考するための理論的基礎となりうるからである。

結論

教育実践における真理の意味について、宗像誠也(1975)の次のような主張が参考となる。1960年当時、宗像にとって教育行政は、『学習指導要領』を「基準」とすることで、「真実を曲げるもの」(宗像1975: 45)だったという主張がそれである。

翻って、今日の学校教育についてはどうだろうか。今日においても、『学習指導要領』は法的拘束力を持ち、教育実践の「基準」として機能している。真理という観点から見れば、本稿で整理したように、実践の「尺度」あるいは「基準」としての真理概念が、ここで問題になっていると言えるだろう。これは、ハイデガーが「伝統的な真理概念」として斥けた概念である。

それでは、「隠れなさ」としての真理概念は、今日の教育実践において考慮されているのだろうか。現行の『学習指導要領』では、「真理を求める態度を養い」(文部科学省2017: 1)とあるように、真理は〈求められるもの〉として言及されている。「真理を求める」という態度は、「隠れなさ」としての真理へと到達す

ることを目的としているようにも見えるが、それは紛れもない仮象である。というのは、そのような考えのもとでは、真理を求める態度そのものが、教育の目的として、教育実践の尺度となってしまうからである。「隠れなさ」としての真理へ到達することは、それ自体が目的となると、直ちに実践の尺度へと転換するという危険性を有する⁷⁾。

それでは、「隠れなさ」としての真理は、教育実践において、どのようなものとして理解することができるのだろうか。あるいは、教育実践において、「現われ」は、どのようなものとして理解されうるだろうか。アーレントが、自らの「誰」の開示を「言論」に委ねていたことは、この問いに対して示唆的である。というのは、言葉を用いて自らの「誰」を他者の開示することが「現われ」である以上、教育実践における言語活動もまた、これと類比的に考えることができるからである。すなわち、言語活動によって自らの「誰」を開示することこそ、教育実践における「現われ」なのである。

アーレントが、その言論行為論において、人間に特有な唯一性、そしてその逆説としての複数性を論じていることは、言葉を用いて他者と相互共同的に言語活動をすることの意味を明らかにしている。アーレントにとって言論は、人間の複数性によって支えられているのであり、同時に、人間の複数性が、言論によって支えられているのである。その意味において、他者との相互共同的な言語活動は、人間の複数性を支えている。

そして、教育実践においてもまた、他者との相互共同的な言語活動は、その条件である⁸⁾。それは、隠されたままの「誰」が、言葉によって開示され、他者にとって可視的になることを意味している。この「誰」の開示こそ、教育実践における「現われ」の意味に他ならない。

しかし、これを単なる意見の表明と解することはできない。また、「現われ」を教育の目的とすることもできない⁹⁾。というのは、先に述べたように、「現われ」を教育の目的に設定すると、それは直ちに教育実践の尺度となってしまうからであり、また、「誰」を開示する言論は、複雑に構成されており、単純に教育の目的と接続することが困難だからである。ここでは、ハイデガーが『存在と時間』の第5章A「現の実存論的構成」における「開示性」(Erschlossenheit)を構成する「情態性」、「理解」、「語り」の三要素について論じていることを検討する必要があるとともに、アーレン

トの言論行為論において、その構成が機能しうることを論証しなければならない。この論証を経てはじめて、アーレント的な「誰」の現われの具体的な構成が明らかとなる。この点に関しては、今後の課題としたい。

参考文献

【Arendt, H. の文献】

※アーレントの文献からの引用に際しては、以下の略記号の後に、原著のページ数と邦訳書の頁数を示した。引用は筆者による私訳である。

OT = 1968 [1951]. *The Origins of Totalitarianism*, A Harvest Book, San Diego.

HC = 1958. *Human Condition*, The University of Chicago, Chicago. [1994 志水速雄訳『人間の条件』, 筑摩書房。]

Va = 1981 [1960]. *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, Piper Verlag, München/Zürich. [2015 森一郎訳『活動的生』, みすず書房。]

BPF = 2006 [1961]. *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, introduction by Jerome Kohn, Penguin Books, New York. [1994 引田隆也・齋藤純一訳『過去と未来の間』, みすず書房。]

EU = 1994. *Essays in Understanding 1930-1954*, edited by Jerome Kohn, Harcourt Brace & Company, New York. [2002 齋藤純一・山田正行・矢野久美子訳『アーレント政治思想集成 1・2』, みすず書房。]

AHB = 1998. *Hannah Arendt / Martin Heidegger, Briefe 1925 bis 1975 und andere Zeugnisse*, Ursula Ludz (hrsg.), Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M. [2003 大島かおり・木田元訳『アーレント＝ハイデガー往復書簡：1925-1975』, みすず書房。]

【Heidegger, M. の文献について】

※ハイデガーの文献からの引用に際しては、次の略記号の後に、原著の頁数のみを記した。引用は筆者による私訳である。

SZ = 2006 [1927]. *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen.

GA9 = 1976. *Wegmarken*, Friedrich-Wilhelm von Herrmann (hrsg.), Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M.

【二次文献】

Beiner, R. 2008. "Rereading 'Truth and Politics'", *Philosophy & Social Criticism*, vol. 34, no. 1-2, pp.123-136.

Brennan, A. & Malpas, J. 2011. "The Space of Appearance and the Space of Truth", in: Anna Yeatman, Phillip Hansen, Magdalena Zolkos and Charles Barbour (ed.) *Action and Appearance: Ethics and the Politics of Writing in Hannah Arendt*, The Continuum International Publishing Group, New York, pp. 39-52.

堀尾輝久 1992 「『発達と教育』に関する課題研究及び研究委員会のあゆみ」, 『教育学研究』, 第59巻第3号, 338-344頁。

川崎修 2010 『ハンナ・アーレントと現代思想：アーレント論集Ⅱ』, 岩波書店。

小玉重夫 2013 『難民と市民の間で』, 現代書館。

—— 2016 『教育政治学を拓く：18歳選挙権の時代を見すえて』, 勁草書房。

Leibniz, G. W. 1998 [1720]. *Monadologie: Französisch/ Deutsch*, Übersetzt und herausgegeben von Hartmut Hecht, Reclam, Stuttgart. [2005 清水富雄・竹田篤司・飯塚勝久訳『モノドロロジー／形而上学序説』, 中央公論新社。]

文部科学省 2017 『小学校学習指導要領』。

宗像誠也 1975 『宗像誠也教育学著作集』, 第4巻, 青木書店。

Phillips, J. 2013. "Between the Tyranny of Opinion and the Despotism of Rational Truth: Arendt on Facts and Acting in Concert", *New German Critique*, vol. 40, no. 2, pp.97-112.

佐藤光友・松本啓二郎 2012 「子どものための哲学教育：プラトンの『洞窟の比喩』を端緒にして」, 『大阪教育大学紀要 第IV部門』, 第60巻, 第2号, 109-119頁。

Taminiaux, J. 1997 [1992]. *The Thracian Maid and the Professional Thinker: Arendt and Heidegger*, Gendreau, M. (trans.), State University of New York Press, Albany.

田中智志 2017 『共存存在の教育学：愛を黙示するハイデガー』, 東京大学出版会。

Tchir, T. 2017. *Hannah Arendt's Theory of Political Action: Daimonic Disclosure of the 'Who'*, Palgrave Macmillan, Cham.

Villa, D. R. 1996. *Arendt and Heidegger: the fate of the political*, Princeton University Press, New Jersey. [2004 青木隆嘉訳『アーレントとハイデガー：政治的なものの運命』, 法政大学出版局。]

Vollrath, E. 1988. "Hannah Arendt und Martin Heidegger", in: *Heidegger und die praktische Philosophie*, Annemarie Gethmann-Siebert und Otto Pöggeler (hrsg.), Suhrkamp, Frankfurt a. M., pp.357-372. [2001 下村鏝二／竹市明弘／宮原勇監訳「ハンナ・アーレントとマルティン・ハイデガー」, 『ハイデガーと実践哲学』, 法政大学出版局, 474-495頁。]

註

- 1) 「真理のエージェント」という概念は、宗像誠也の「真理の代理者」としての教師という概念を指している。宗像は、1963年に出版した小冊子において、教師の教育権は、憲法上で規定された子どもの「教育を受ける権利」の「照り返し」として成立するとしている。この議論において、「真理の代理者」とは、「真理を伝えるもの、真理を子どもの心に根づかせ、生かし、真理創造の力を子どもにもたせる役目をするもの、というような意味である」(宗像1975: 104)。小玉の議論において、宗像の「真理の代理者」論への批判として取り沙汰されているものが、「発達」という概念である。1970年代の日本の教育学における「発達」研究に関しては、堀尾 (1992) を参照 (cf. 堀尾1992: 338ff.)。
- 2) 伝統的な教育における真理について、田中 (2017) は、ハイデガーの「隠れなさ」(田中はUnverborgenheitを、「隠れたものでなくなるもの」と訳している) を参照しつつ、「ハイデガーのいう「隠れたものでなくなるもの」としての「真理」は、伝統的なヨーロッパ的な教育に対する批判根拠となりうる」(田中2017: 257) と述べている。本稿は、ハイデガー内在的に教育における真理を考察するが、「宗教性」に帰着する田中の議論とは異なり、アーレントのハイデガー批判をもとに論を展開す

るものである。

- 3) ベイナーは、同論文を、「アーレントの判断と真理に関する見解の、最も直接的な声明」(Beiner 2008: 123)としている。また、フィリップスは、「アーレントの1967年の論文「真理と政治」は、政治的行為の自由は真理よりも意見の問題であるという彼女のテーゼの非常に明確な記述を提供している」(Phillips 2013: 97)と評価している。
- 4) これはアーレント自身が述べているように、ライブニッツ的な真理の区別である (cf. BPF, 226=312)。ライブニッツは、『モナドロジー』において、真理を、「理性の真理」(verité de Raisonnement, Wahrheit des Vernunftgebrauchs) と「事実の真理」(verité de Fait, Wahrheit der Tatsachen) とに区別した。前者は必然的でその逆はありえないものであり、その分析を進めていくと原初的な観念や真理にたどり着くが、後者は偶然的でその逆も可能なものであるという相違がある (cf. Leibniz 1998: 28-29=2005: 14)。
- 5) 「アトム化」という概念は、『全体主義の起源』においても論じられている。アーレントによれば、20世紀の全体主義が隆盛した原因は、大衆が「アトム化された社会」(atomized society)の断片から生じたことにある。そして、「大衆のうちの個人(the mass man)の主な特徴は、残虐さでも後進性でもなく、その孤絶(isolation)と、通常の社会関係を欠いていることである」(OT, 317)とも言われる。彼女によれば、全体主義の起源は、大衆が忘却されていて、「一人でいること」(being alone, monos)のうちにあり (cf. OT, 476)。
- 6) アーレントの「誰の現われ」(「誰」の開示)とハイデガーの「隠れなさ」の類似を指摘している論稿として、次のものを挙げておく。Villa [1996: 146ff. = 2004: 242ff.], Brennan & Malpas [2011: 47], Tchir [2017: 100ff.]。
- 7) この点に関連して、佐藤・松本(2012)による実践が示唆的である。佐藤らは、ハイデガーの「洞窟の比喩」解釈における「隠れなさ」を、真理の本質として、子どもたちに考えさせるという実践を行った。彼らが実践後に記した反省点には、本稿が扱っている「真理の二義性」に関するものがある (cf. 佐藤・松本2012: 116)。当該実践は、隠れなさとしての真理が、後に伝統的な真理概念である「一致」に発展するという点を踏まえられなかった。佐藤らの実践は、隠れなさとしての真理を、教育によって理解させることの困難を示したのである。
- 8) 田中(2017)は、『存在と時間』の「良心の呼び声」、および後期ハイデガーの「思考」(Denken)と「詩作」(Dichtung)の議論を、キリスト教的な「アガペー」としての愛との関連で論じつつ、教育の基礎について述べている。いわく、「〔上略〕教育の本態は、「思考」と「詩作」に示される「言う」こと、すなわち「良心の呼び声」に聴き従う、自・他の呼応関係である。この呼応関係は、人が〈よりよく生きようとする〉ための倫理的マトリックス(倫理基盤)であるという意味で、教育の基礎でもある」(田中2017: 462)。本稿の文脈において、この議論は、教育実践を支える他者との相互共同的な言語活動という教育の条件を記述したものとして理解されうる。
- 9) 小玉(2013)は、ハイデガーの「ひと」(das Man)の概念と、アーレントの「演劇的行為」を交錯させながら、政治的行為そのものは「手段」ではなく「目的」とであると論じている (cf. 小玉2013: 122ff.)。本稿は、ここで小玉が慎重に、政治的行為が教育

の目的であると論述していないことに着目したい。政治的行為の目的は、必ずしも教育の目的と重なるわけではないのである。

(指導教員 小玉重夫教授)